
IS インフィニットストラトス ~ 蒼雷の異業騎士と再来の風・黒き雨 ~

夢を忘れた者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス ～蒼雷の異業騎士と再来の風・黒き雨～

【Nコード】

N3330Z

【作者名】

夢を忘れた者

【あらすじ】

神様(?)のせいで『ISインフィニットストラトス』の世界に行く事になったオリ主。悪しき罪を裁く断罪の剣が今舞い降りる
『然るべき報いをツ(アンサラー)』

これは『IS インフィニット・ストラトス』と『ナイツ・オブ・

ザ・フリークス』のクロス&オリ主&オリストモノです

クロスモノが苦手な方は を押して下さい

プロローグ（前書き）

パパ聞きの方もある程度書けてきたので、投稿します

では本編スタートです

プロローグ

目が覚めるとそこはポニーテールの良く似合う女の子（15〜17歳ぐらい）が顔を覗き込んでいた。

「おう。起きたか？屑。起きたんだよな？じゃあ早く起きやがれ！屑、ノロマ、不能男・・・」

「ウガー！！！」

いきなり罵詈雑言を言い放つ女の子に思わず奇声をあげてしまった。

「なに？変な顔をして？不能男なら不能男らしく・・・」

「もう口を開くな！！お、俺のお前に対する何かが崩れちまう！！そして、俺は不能男じゃねえ！！！！！」

その子は見た目は、絶世の美少女なのだが口調が絶望的に悪かった。

「おい、屑。我は神様だ！そして、お前に少し頼み事あんだけど聞けよ？！拒否権はねえからな！！！」

「それが人にモノを頼む態度か！！！そして、拒否権を寄越せ！！」
そんな怒鳴り合いが一時間ほど続いた後

「うぜーな。はあ。じゃあまあ、我ができる範囲で能力を5つ叶えてやるうー！！！」

「相も変わらず暴言を吐くな！！ハァー能力か。うーん、『ナイツ・オブ・ザ・フリークス』の蒼雷の逆鱗と聖骸の力があれば問題無いと思う。・・・んで、なんでそんな事を聞く(汗)」

「決まってるんだろ。イレギュラーのいる別の世界に連れて行く為だ！！まあ、後の3つはいつか叶えてやろう！！」

寝耳に水とはこの事だろう。神様が出て来た時点で何かおかしいと気付くべきだった。今更だが世界って理不尽だなと思っていた。

「アホ吐かすな！！！！じゃあなにか、俺はイレギュラーを倒すために此処に連れて来られたのか？！！」

嫌な空気だったが、俺がいる理由をはっきりさせる為に神様(?)に問掛けた。すると、神様(?)は良い笑顔でサムズアップしてきた。俺の中の堪忍袋があっけなく切れ、柄にもなく怒鳴ってしまった。

「何してくれたんだ！！！！」

「そんなに怒鳴らなくて良いから願い事はもうないの?・・・無いならお前が望んだ力を渡すから!？」

「ちょっと待てやあ！！！！」

と怒鳴った瞬間こちらに向かって何かを投げられた。慌てて受け取るとそれは蒼いチョーカー(?)だった。

「ちゃんと渡したからな?安心しろ！！イレギュラーを片付けたら元の世界に帰してやる！！さあ逝って来い！！！！」

「『行つて来い』の間違えだよな?! そうだよな?!... って、目を反らすな!!!!!!!!!!」

神様(?) は何か思い出したかの様にこちらを向きまた爆弾を投げた。

「そうそう。逝くのは『I S インフィニットストラトス』の世界だから。じゃ、逝ってらっしゃい〜」

ムカつく声で言われた途端足下に直径2mの穴が開き、そこになすなべなく俺は落ちていった。

side 神様(?)

誰もいない空間で彼女は一人呟く。

「落ちた先に待ち受ける運命に期待と不安を抱え彼は何を成すのか。何を失い何を得るのか。本当に楽しみだ。イレギュラーの事もあるが彼が選ぶ未来に幸あれ。」

言い終わるとその場を離れ始めた。

そしてその場には誰も居なくなつた。

side 神様(?) out

プロローグ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

1話 大罪の獣々マスターテリオン (前書き)

戦闘前までになります

では本文スタートです

1話 大罪の獣くマスターテリオンく

学年別トーナメント

第一試合

織斑一夏&シャルロット・デュノアVSラウラ・ボーデビツヒ&篠ノ野幕

試合の終盤戦に差し掛かり、ラウラがシャルの盾殺し（シールドピアース）で吹き飛ばされ壁にぶつかった直後事態は一変した。

side 一夏

シャルのシールドピアースが決まり俺達の勝利が確定しようとした時、ラウラの機体がいきなり放電し始めた。機体の装甲がドロドロに溶け、それがラウラを包み一振りの刀を持った人物の姿になった。その姿を見た瞬間俺の頭は怒りで真っ白になった。

side 織斑一夏 out

side シャルロット・デュノア

いきなり放電し始めたラウラにも驚いたが、その後に形体変化（？）

が起こった。その姿は例えるなら世界最強の武士。その姿を見た一夏は怒りの声を上げながら生身で戦おうとしていた。けれど幕さんに止められ、諭されたが彼の信条は揺るがず、ただエネルギーが無いのを悔やんでいた。

「『エネルギーがないなら別のところから持ってくればいい』ってことだよな」

僕は一夏に確認をとり、すぐに実行した。

side シャロット・デュノア out

side 篠ノ野幕

私には一夏と共に戦う力が無い。今は無力を嘆く暇はない。分かっている。だからこれだけは言いたい。

「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「何を心配してんだよ、ただ俺を信じて待っていてくれ。必ず勝つて帰ってくる」

私の必死の叫びに答え戦場へ向かう彼の背中に向け約束を交わす。

「か、勝ってこい一夏！」

「ああ！行ってくる」

s i d e 篠ノ野 葦 o u t

s i d e ????

「あそこから反応がある」

学園の外周からアリーナの方を向き呟く男がいた。

男は、夏を間近に控えたこの時期に不釣り合いな蒼白の長外套ロングコートを着て、長髪の黒髪が風で揺れると、その奥からは蒼い目が見えた。

彼が、双眼鏡を使わずに三km離れたアリーナの様子をみているなんて、誰も分からなかった。

彼はふと視線を反らし裏路地に入って行った。

人の目がなくなった瞬間、その路地から蒼い稲妻がアリーナの方に飛んで行った。

s i d e ???? o u t

s i d e 織斑一夏

俺は今混乱の中にいる。

俺が一閃二断を使いラウラを包んでいた黒いISを撃破しカタパルトデッキに向かおうとした時アリーナのバリアを破り何か黒いモノがアリーナ中央に落ちた。何事かと思いきやそちらを見ると、そこには体が半分程が黒くなっており、周囲に釘や杭などを浮かべ立っている(.....)。

浮いている釘や杭などはISの装備と思えばまだ受け入れられる。

だが、生身の人間がアリーナのバリアを破ったり、高高度からスカイダイビングで落ちてきたにしてもパラシュートとも無しに地面に着地出来る筈もない。

そんな事を思考していると落ちてきた女の子は、いきなり釘や杭を射ってきた。

交わせないタイミングで発射された必殺の一撃は俺やシャルロット、ラウラに直撃コースで迫ってきた。

『俺は、まだ誰一人として守れていないまま死ぬのか』そんな考えが頭を横切った瞬間、辺り一面が真っ白に染まり雷が落ちた様な轟音が響き渡った。

轟音が収まりあの後どうなったのか気になり急いで目を開けるとそこには一人の騎士がいた。

その姿は、全身をくまなく覆っている蒼銀の装甲。それは甲殻と言うには金属的で、甲冑と言うには生物的過ぎた。異形と呼ぶには洗練されており、騎士と呼ぶには禍々しい。

銀の鬣を海風になびかせ、天を突く三本の雷角を備えた鬼神を象るフルフェイス。四肢を、胴を仰々しくも力強く鎧う紫電帯びる甲殻。肩と肘には爪とも角とも見える大小の尖塔が伸び、背面に垂れ伸びる七本の尾はそれぞれが鋭利に煌めく蛇腹剣の如く。肩元から垂れた無数の肩巾。首に巻かれた長大な二重の帯布は、蒼白の四翼が猛り羽撃く（はばたく）かのように、帯電しながら海風になびく。

右の手甲に刻まれているのは、対の曲刃を象った装飾。それがひときわまばゆい電光に煌めいた瞬間、無数の肩巾と垂れた七尾が衣状に連なり、さながら蒼銀の騎士外套となつて翻る。

その騎士（？）は落ちてきた女の子に向けて話だした。

「我が名は『神罰』ベインキラー……貴様は大罪嫉妬罪銘絶夢だな……
……堕ちた者は元には戻らぬ……だからこの場で断罪する……
然るべき報いを（アンサラー）」

そう言ってその人は女の子に向かって行った。

s i d e 織斑一夏 o u t

1話 大罪の獣々マスターテリオン (後書き)

ご意見感想お待ちしております

ではまた次回

2話 蒼雷の異形騎士とナイト・フリークス（前書き）

なんか出来ちゃったので投稿します

やればできるんだなあとしみじみ思いしった

では本文スタートです

2話 蒼雷の異形騎士とナイト・フリークス

side 織斑千冬

学年別トーナメントの途中で現れたアリーナのバリアを破壊して高度から落ちて来た女。人体構造上ありえない着地を見てしまい、一瞬だが啞然としてしまった。

その一瞬の隙に女は一夏達に向け攻撃を仕掛けて来た。女の攻撃が当たると思った直後蒼いイナズマが降り注ぎ、攻撃の全て叩き落とした。

蒼いイナズマは土煙が上がるアリーナに徐々に姿を表した。

その姿は、全身をくまなく覆っている蒼銀の装甲。

それは甲殻と言うには金属的で、甲冑と言うには生物的過ぎた。異形と呼ぶには洗練されており、騎士と呼ぶには禍々しい。銀の鬣を海風になびかせ、天を突く三本の雷角を備えた鬼神を象る全面兜フルフェイス。

四肢を、胴を仰々しくも力強く鎧う紫電帯びる甲殻。肩と肘には爪とも角とも見える大小の尖塔せんとうが伸び、背面に垂れ伸びる七本の尾はそれぞれが鋭利に煌めく蛇腹剣じやばらけんの如く。肩元から垂れた無数の肩巾ひれ。首に巻かれた長大な二重の帯布マムライは、蒼白の四翼が猛り羽撃く（はばたく）かのように、帯電しながら海風になびく。

右の手甲に刻まれているのは、対の曲刃を象った装飾。それがひときわまばゆい電光に煌めいた瞬間、無数の肩巾と垂れた七尾が衣状に連なり、さながら蒼銀の騎士外套サーコートとなって翻る。

そこには異形という形の騎士がいた。騎士は女に対峙し話だした。

「我が名は『神罰』ペインキラー。貴様は大罪嫉妬罪銘絶夢ケースエンビアーコードパイツアダストだ。……

……堕ちた者は元には戻らぬ……。だからこの場で断罪する！……然るべき報いを（アンサラー）」

そう叫ぶとその騎士は女に向かって行った。

side 織斑千冬 out

side シャルロット・デュノア

落ちて来た女に攻撃されると思った瞬間、雷が落ちた様な轟音が響き視界を真っ白にした。視界が回復すると目の前に蒼銀の異形騎士ナイト・フリークスがいた。

『人が人でなくなる時、蒼雷の騎士が来る』

あの噂は本当だったんだ。

人が人でなくなるとはこういう事わからなかった。

だが、今目の前に蒼雷の騎士がいる。ならば、あの女の子は『人でなくなつた』ということになる。

けど見た目は変わらない。変わっていないが不自然に笑みを浮かべ釘や杭を空中に浮かべている。

普通はあり得ない光景、けれど今目の前で起こる光景。

その光景に唾然としながらただ現れた騎士を視界の端で見ている。

side シャルロット・デュノア out

side 異形騎士

業魔に堕ちた女に向かって走る。だが、本来の力を使っていないため相手に迎撃される。

「チツ！！」

初撃で相手を仕留められなかった事が今更ながら悔やまれる。

普通は聖骸を消費するのだが神様（？）の粋な計らいか体力を消費するようになっていた。これで業魔化する危険性は減ったが戦った後、急激に空腹になるのは悩みの種だ。

そんな風に思考を巡らせていると、女から攻撃してきた。それを紙一重で避けつつ直撃のモノを雷撃を使い迎撃する。

いい加減空腹も限界に近いたため左手から雷撃を生み出しそれを右手で掴み取る。蒼銀の籠手で握ると雷光は一瞬で収束し、硬質な刃の姿を象った。

蒼い雷光によつて編み上げられたその剣刃を女に向かって投げる。投擲した雷剣は、雷撃本来の特性のままに、一瞬で女に当たった。雷剣で痺れているであろう女に向けて数十本の雷剣を投げると、相手の女は逃げる様な素振りを見せた。しかし体が痺れているため、思うように動かない。聖骸を全身に籠めると自身を雷に変え、相手の目の前に移動する（……………）と前もって溜めていた聖骸を腕に籠め『雷拳』を使い相手を打ち抜く。女は打ち抜かれた事で罅割れ始め、崩れていった。

黒い灰にも似た残骸が風に吹かれて消えた。後には、淡く輝く罪の結晶　聖骸だけが残される。

それを喉元にある逆鱗で吸収し、ここからどうやって帰ろうか思案しているとおレンジ色の鎧（？）を纏った少女が話掛けてきた。

「……………あなたが蒼雷の騎士なんですか！？」

帰る事が最優先になつている今の俺は軽く頷くと、その後に話し掛けられた事に気付かず、周囲を囲まれる前に自身を雷に変え学園の

外へ逃げ出した。

side 異形騎士 out

side 織斑千冬

落ちて来た女を『大罪嫉妬罪銘絶夢』と呼んだ蒼銀の騎士は、攻撃を仕掛け始めた時から私と山田先生は、騎士と落ちて来た女のデータを記録し始めた。ISではなく生身の人間がISと同等かそれ以上の力を検出した時唖然としてしまった。その時あり得ない光景が目の前に現れる。

いくらISを改造したとしてもこれはあり得ない。

その光景を見たとき知らず知らず呟いていた。

「体を電気化しそして標的の前で再度物質化するだ！？」

それは現存するISいや、あの束でも開発出来ない事だった。確かに武器を粒子化し収納はできるが、自身の体を粒子化いや、電気化しそれを移動の手段に使ったり、雷撃を収束させ剣を作るなど出来るはずがない。だが、目の前に存在するあの騎士はそれを簡単にやっってしまった。それに畏怖の念が込められているのか、騎士の噂は聞いた事がある。曰く『血も涙も無い怪物』、『人を殺す悪魔』、『罪人を裁く断罪者』。

騎士の事を調べようにも手掛りが無い。『現れ事が終われば消え去る』

だからか付けられたあだ名は『亡霊の異形騎士』
ファントム・ナイト・フリークス

「あ、あの織斑先生。……………デュノア君が騎士に話し掛けよ

うとしています。」

「なにっ!!!!!!!!!!」

デユノアの行動に驚きはしたが、敵か味方かを見極めるいい機会だったのでそのまま、様子を見ることになった。だが、少しだけ話したかと思えば再び自身を雷に変え学園の外へ逃げ出してしまった。

s i d e 織斑千冬 o u t

2話 蒼雷の異形騎士(ナイト・フリークス)(後書き)

敵に関してですが、強欲と暴蝕と傲慢の罪名で何か良いのがあれば教えて下さい(＜人＞)

例

大罪 傲慢 プライド

罪名 唯我 リベリオン

てな感じをお願いします

(＜人＞)

ご意見、ご感想、ご指摘等もお待ちしております。

3話 行き倒れの男と男の娘!?(前書き)

シャルロットとの出会い?までです

なんか書いてたら最長になっちゃいました

(ヽ テヘッ

では本文スタートです

3話 行き倒れの男と男の娘！？

side ????

バイツァダスト
絶夢との戦いが終わりその場から離脱して、学園の外周部にたどり着くと空腹でめまいを起こし、倒れて意識を失った。

side ???? out

side シャルロット・デュノア

僕はあの異形騎士ナイト・フリークスが向かった方向に走っている。あの後アリーナで起こった事は箝口令が敷かれ、出撃していた僕と、一夏、篠ノ野篤さんは別で事情聴取を受けた。

僕はそんな事よりもあの騎士を追い掛けたかった。追い付いて聞きたかった。

あの時、僕の母さんをその手で殺した時、あなたは何を思い僕を助けてくれたんですか・・・あなたは何処にいるんですか

教えてよ『蒼夜』

side シャルロット・デュノア out

side 蒼夜

意識を失っている間に誰かが俺を医療施設のある場所まで連れて行ってくれたみたいだ。辺りを見回してみるとその部屋は学校の保健室のようだった。

持ち物を確認したが無くしている物がなかったので、ボーとしていると部屋の扉が開き黒いスーツに身を包んだ目付きの悪い女性が入って来た。

「起きていたか・・・貴様今の状況は理解しているか？」

「・・・いえ、全く分かりません・・・できれば説明して欲しいのですが」

どうしてこのような状況になったのか皆目検討がつかなかった。

side 蒼夜 out

side 織斑千冬

今日の前にいる男は、学園の外周で倒れていた所を巡回中だった教員チームが見つけれ連れて来たのだ。

「・・・端的に言えば、お前はこの学園の外周部で倒れていたのを発見され、ここに連れて来たのだ。・・・まあ、簡単に言ってしまうえばそんな感じか・・・では本題だ。何故あの場所で倒れていた！？答えようでh「グッ！」ッ」

本題を話している最中にヤツの腹のムシが鳴いた。もう盛大に鳴い

た。聞き逃せない位に鳴いた。

「……………腹が減っているのか？」

少々呆れながら聞いた。

「……………すみません。もう半月ほどまとも食べて無いもので……………ほぼ水しか取ってないなんてさすがに言えないよ」

「声に出ているぞ」

呆れた事に半月も食べていなかった様だ。しかしよく水だけで半月も生きて来られたなあと関心している所もあった。だがしかしこのままでは、ラチがあかないので、

「おい、今からこの学園の食堂に行くが問題ないか？」

と聞くと顔を輝かして即答した。

「お願いします。ありがとうございます。」

side 織斑千冬 out

side 織斑一夏

俺とシャルロットは食堂で遅い晩飯を食べていた。

ちよつと海鮮塩ラーメンの麺を食べ終った時千冬姉が何かを引きずって食堂に入って来た。引きずっているモノの正体は遠目であった

「ハハハ、良い食いつぶりだね。気に入った。たくさん食べな！」
そう言っておばちゃんは笑いながら調理場に戻って行った。

・・・数分後、目の前の男はドンブリを10杯、ラーメンを5杯、デザートを5個を食べてた。
ふと見ると、食べ終わり満足そうな男にシャルロットが真剣な目で話し掛けていた。

side 織斑一夏 out

side シャルロット

あの騎士に似ている男が目の前にいる。季節外れの蒼白の布地の長外套を着ているその人は、食事が終わると立ち上がり何処かに行こうとしていたので、タイミングをみて話し掛けた。

「ねえ。聞きたい事があるんだけど？」

「ん。何かな？」

「君は『蒼雷の異形騎士』の事を知ってる？」

「うん。まあ、一般常識程度ならだけど。」

普通の会話のように聞こえる。だがその会話を聞いている者にとっては氷点下に居るんじゃないかと錯覚してしまうほど冷えきっていた。

「じゃあ。知ってる事を教えてよ。」

「良いよ。……そうだなあ。これはあの騎士を見たら分かる事だが、あれはISインフィニット・ストラトスじゃないってこととあれは現存するどんなISでも倒す実力がある（……）って事かな。」

「へえ。……質問なんだけど」

僕はこの会話の要である質問を聞いた。

「5年前にフランスで起こった事件を知ってる？」

「ああ、知っている。あの騎士が始めて世に出た事件だろう。」

その答えを聞き僕は彼があの『蒼雷の騎士』だと確信した。満足げに頷いていると、黙っていた一夏が男に問い掛けてきた。

「なあ。『5年前にフランスで起こった事件』ってなんの事だ？」

「知らないのか！？目の前にその事件の被害者がいるのに」

「僕が話していないだけだよ。……余りあの時の事を語りたくないから。……そうだ！！知ってるいるなら一夏に教えてやっつてよ。」

自分の事を話すのは苦手だ。だけど、あの場にいたもう一人の証人として

『蒼雷の異形騎士』(キミ)が話してくれるなら安心できる。

s i d e シヤルロツト o u t

3話 行き倒れの男と男の娘！？（後書き）

初めてオリ主の名前を出しました

オリ主の簡単なプロフィールです

氏名 三天 蒼夜

年齢 18歳（転生前 22歳）

特技 武道と食事

今は以上です

ある程度進んだら詳しいプロフィールを作ります

次回はオリストになります

ご意見ご感想ご指摘等お待ちしております

4話 フランス事件く上く(前書き)

ちょっと長くなりそうなので、2く3部に分けて更新します

土日は執筆できそうにないので平日に更新していきます

では本文スタートです

4話 フランス事件くす

side シャルロット

あの光景を僕は決して忘れないだろう

……あの断罪者の悲しげな背を、母さんの変貌を、楽しくも儚い夢の様な日々の崩壊を……

side シャルロット out

side 蒼夜

織斑一夏がフランスであった事件を知らなかったので、俺はシャルロットに許可を取り話し出した。

「……事件の始まりはある一人の少年が、フランスの山中にある町を訪れた事から始まる。……」

辺りはシーンと静まり聞きいつていた。

side 蒼夜 out

町外れにある親子が住んでいる。町で一番の美人親子であるが人目を避けるように住んでいる事に疑問の声も上がるが、彼女達の意思

で住んでいるで何も言えなかった。親子の名前はシャルロットとカティアという。

ある日、町に男が訪れた。その男は容姿はアジア系で、何故か初夏を迎えようとしている時期に『蒼白の長外套』を纏い、蒼いチヨーカーを身に付けていた。

ドコからか落ちてケガをしているのか、左腕に力が入っていないかった。

それを見たシャルロットは『大変早く治療しなくちゃ』と思い自宅に招いた。

男はお礼を述べ足早に出て行こうとした。

「待つて下さい！！ちゃんと治療しないと後々困る事になりますよ！？」

必死で説得し左腕が完治するまでという条件で、彼は彼女の家に厄介になることになった。

side シャルロット

あの男の人はどんな生活を送っていたのか、もう治っているが身体中に切傷や銃痕、裂傷、火傷があった。男の人は『あることをしていたらこうなった』と言って詳しくは教えてくれません。

左腕だけかと思われたケガも右の肋骨に罫が入っていたりして全治二ヶ月と医者に言われた

そんな事に気にする風もなく彼はヒョウヒョウとしていた。

……数日後近くの町で事件があったらしく軍隊が町の近くまで防衛線を張っていました。

彼は母さんと話す機会が増やしていました。何を話しているのか聞

いてみましたが、『単なる世間話よ』と言って取り合ってくれませ
ん。

そして彼はしばらく治療に専念しました。……彼はキズが
完治すると、すぐに町を出て行こうとしました。

その背中にキズ以外の何かを背負っているみたいに見えて、放つて
置けなくて、何故か胸のなかгомヤモヤで一杯になっていました。
ふと、ある風景が目の前に現れてすぐに消え去った。

それは満月が綺麗な夜、彼が月に向かって泣き叫ぶ光景だった。

それを見たからか、歩き出していた彼の目の前に移動し、両手を握
って

「……やっぱり行かないで。……あなたの背負っているモノは
何かは知らない、けどあなたを知っている。……あなたは僕達親
子を傷付けない。……それにこの胸のモヤモヤが何なのか知りた
いから」

そう言っていた。母さんは彼と私を見てニッコリと微笑み私に頷き
ました。

「あらあら、シャルロットにも春が来たのね」

なんて、からかってきました。ですが私はそんな気はなかった。だ
けど、彼が微笑したのを見てしまい赤面してしまった。
それを見た母さんがニヤニヤしていました。

「ねえ、あなたの名前を覚えてくれないかしら」

母さんが今更ながら問いかけてきた。

「そついえば私も聞いていなかったから、教えてよ。」

ケガの事もあったが、聞く機会が多かったのに聞けなかったので、聞こうと耳を傾けていた。

「……………三天蒼夜……………蒼夜って呼んで」

そつ言うと背を向けてしまった。どうしたのかと思つたが、耳まで真つ赤にしていた。その姿が可愛いと思つてしまった。

side シャルロット out

4話 フランス事件〜上〜（後書き）

一応、上 シヤルロット、中または下 カティアと蒼夜の話にするつもりです。

まあご都合主義な部分もありましたがいかがでしたか

ここまでの更新が一日で構成し、執筆してできてるなんて自分でも信じられません。

二日頭を休めて今年の後二週間頑張ろうと思います。

では良い週末を

5話 フランス事件〜中〜（前書き）

更新しました

今回は蒼夜が転生しシャルロット達が住む町に、たどり着くまでと蒼夜が連れて来られたシャルロット達の家の様子になります

シャルロットの母さんの名前はお気に入りゲーム内から選び出しました。

では本文スタートです

5話 フランス事件〜中〜

side 蒼夜

俺が転生した場所はフランスの山中だった。一応世界を旅して回っていたので、日常会話や習慣、作法などの違いに嫌悪する事はない。今の現状は崖の近くにある岩にしがみつき崖から落ちないように頑張っている。

「・・・あのバカ神が！！！！！」

こんな状態になったのには理由がある。

あの穴に落ちた時すぐに気を失った。
気が付くと崖のふちにいた。そのためか立ち上がろうとした時、足が滑り落ちそうになったからだ。

現実逃避もここまでか、そろそろ腕が痺れてきた。もう手の感覚もない。

少しでも岩にしがみつきたかったので、体制を入れ換えようとしたが、うっかり手の感覚がないのを忘れて、岩の出っ張りを離してしまった。掴んでいると思っていた手が滑り、崖の下にまっ逆さまに落ちてしまった。

数分後、気を失っていたのか目を覚ますと体に痛みを覚えた。

「・・・目は見える。風の音も聞こえる。痛みも感じる。地面の感触もある。声も出せる。土と血の匂いを感じる。・・・右側の外傷なし・・・左側腕が骨折および出血・・・左肋骨に痛みなし・・・右肋骨に痛みあり、たぶん罫が入っ

てるな。」

そんな風に自分の体を確認していった。そんな冷静な行動が出来るのも聖骸の力のおかげだ。

数時間後痛みがある程度引いたので、岩にしがみついていた時見つけた川を目指して歩きだした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

数時間が過ぎ川の畔にたどり着いた。

しかし、畔の周囲には人の気配はなかった。だが、近くに道があり往来の側に在ることがわかった。

疲れていたからか少しの休憩の筈が、明け方まで寝てしまっていた。

・・・・・・・・夢を見ている・・・・・・・・あの頃の夢だ・・・・・・・・
アイツとの約束破ってしまったな・・・・・・・・また会えたらちゃんと誤まらないと・・・・・・・・

あの笑顔を見るためにも頑張ろう

目を覚ますと辺りは霧に包まれていた。

体調を確認してみると、左腕と右肋骨以外は良好だった。

俺は道をひたすらに歩き続けた。そして山中にある町にたどり着いた。そこで金髪の少女に出会った。彼女は俺の姿を見て畏れた風もなく、話掛けてきた。

「あの・・・ケガしてるみたいだけど、大丈夫ですか？」

その表情は本当に心配しており、泣きそうになっていた。強引に彼

女が腕を引つ張られ彼女の家に招待された。

side 蒼夜 out

side カティア

娘がケガをした男を連れ込んだ。それは親離れのサインなのかは知りませんが、少なくともこの町にいる同い年の男の子と違う雰囲気
で話していますね。子どもの成長に微笑んでいた。その時ふと心の
中に何かが過ぎつた。

ケーブリード カルマエリュシオン
『罪強欲罪名忘鏡』

心の中を過ぎた何かのいみがわかると、これが自分の罪なんだと気付いた。

side カティア out

side 蒼夜

あの心配してくれた娘は『シャルロット』とその母親は『カティア』
と言っらしい。何故らしいという言い方なのかといえば、まだ自己
紹介していないからだ。

だが、彼女達は話し相手が欲しかったのか暇を見つけては話掛けて
きたきた。例えば、『今まで何処にいたの?』とか『どんなところ
を旅したの?』とか『どうやってここまでできたの?』とか『娘を嫁
にどうかしら?』などだ。・・・カティアさん、シャルロットの許
可を得てから婿探しして下さい。シャルロットも目を開いて驚いて

要るじゃないですか。

シャルロットは事態を理解したのか顔を赤らめ顔は、伏したまま上目使いにこちらの様子を伺っていた。そんな行動が可愛らしいと感じ頬が赤くなるのがわかった。カティアさんはその光景を見てますます俺達をからかうのだった。

s i d e 蒼夜 o u t

5話 フランス事件〜中〜（後書き）

明日でフランス事件は終わると思います

いつも読んでいただきありがとうございます。

ではまた明日更新します

ご意見感想ご指摘等お待ちしております

6話 フランス事件〜下〜（前書き）

なんとかできた

寒くて布団の中から中々出られない季節になりました
体調管理は万全です

今回でフランス事件編は終了です。

では本文スタートです

6話 フランス事件〜下〜

side シャルロット

蒼夜と一緒に住み始めて二週間が経過した。この二週間、母さんが何かあるたびにからかってくる。蒼夜も最初は赤面したりしていたが、今ではまたかなんて呆れた感じで相手をしている。そんな光に満ちた毎日がゆっくりと過ぎていった。

ある日、隣町で殺人事件が起きた。警察や軍隊も動いたが捕まらず捕り逃がしてしまっただけらしい。学校の登下校時、必ず二人以上で行動する事が決まった。

私の家までは一本道だが、暗くなると周囲に人がいるかなんて確認出来なくなる。そんな道だから用心のため、蒼夜に友達と別れる場所まで迎えに来て貰う様に頼んだ。

答えを簡潔に『了解』と言った。そして、帰りはいつものように彼が歩く横を周りを明るくする様な笑顔を浮かべ、彼に寄り添う様に帰宅する。これが私の日常でした。だがしかし、こんな日常も一瞬で壊してしまうモノに出会ってしまった。

それは突然起こった。夕飯を食べ終わりマツタリとしていると、町の方が騒がしく様子を伺うために外に出ると赤々と『町が燃えている』。

炎に巻かれ人々が見えてしまった。

の焼ける匂いが

の悲鳴が

伝わってきた。

脳が壊れるのを防ぐためか意識を失った。

side シャルロット out

side 蒼夜

家を出てすぐ見えた地獄。

人の悲鳴、人の焼ける匂い、人が叫ぶ慟哭。以前にも同じ経験をしていたが、慣れる事はない。不快感が込み上がる。そんな風に思考していると目の前でシャルロットが倒れそうになった。気付いた俺はシャルロットの腕を引き、体を抱き締めながら周囲を警戒した。今の状態でこの火災を起こした犯人に出会えば、どうなるかなんてわかったものじゃない。殺されない様に彼女に生きていて欲しいから。地獄の様な光景に彼女が怯えない様に。ただ、俺は『彼女のための剣になるう。』そう決意し一旦犯人や火災に遭遇しない場所に彼女を連れて行った。

そこは軍隊の治療室。『確か今の軍隊は女性が多かったはずだ。彼女の身の安全は大丈夫だろう。』そんな事を考え、『この愛しい彼女が目覚ましたら、離れ離れになった事を嘆いてしまうだろう。』許してくれるか判らない。だけど、この選択の先に彼女が笑顔で過ごせる世界にするために、今は自身が持つ剣を抜こう。

「…………… 怨んでくれて構わない。…………… 憎んでくれて構わない…………… だが、君のために自分で封じた剣を使う。…………… だからシャルロットは、いつまでも輝いて

かのごとく手を手刀の形に変えた。相手の攻撃の内側を通り、先の止めと同じく胸を突き刺した。

「……………ありがとう。……………私はあなたを赦します。……………だから顔を上げて」

そんな優しい言葉を掛けてもらう資格はない。そう、資格なんてない。……………だってこの手は血に塗れているのだから

「……………あの時の答えですが、……………私は……………絶対に赦せない罪なんて……………何処にもないと思つていますよ…………………………」

「理不尽に誰かを踏みにじり嘲笑う。そんな悪意を……………罪悪の存在を赦さない。……………だってあんた達はまだ泣いているじゃないか……………それに……………見る……………絶対に赦せない罪は、ここにあるじゃないか……………!!」

己の手を見て呟く。大切なモノを殺し、大切なモノを切り捨てる罪悪。現実としてこの手に刻む。

カティアの体が溶けるように消えると彼女がいた場所に輝く結晶が浮かんでいた。

それは罪力の源“聖骸”。

それを掴むとチョーカーに勢い良く呑み込まれた。

残ったのはカティアが着ていた服と、周囲にある残り火だけだった。

「……………弱さを見せるのは今回だけだ。……………次からは絶対に弱さを見せない。」

そう呟き悲哀の感情を抑えず空へと解き放つ

背後に誰かがいるが今は気にせずただ空に向かい吠えた

side 蒼夜 out

side シャルロット

目が覚めると誰もいない部屋で寝ていた。

蒼夜の事が気になり外に出た。外は火の海で人は見付からなかった。何か突き動かされるかのように町の広場だった所にたどり着いた。そこにはただ一人空に向かい吠えている騎士がいた。何が悲しいのか判らなかった。だけど騎士の前に胸の部分が破れた母さんの服があった。騎士の右手は誰かの血に濡れていた。母さんを殺した騎士。怨念の籠った目で睨んでいると、騎士は立ち上がりこちらをチラッと見てから何処かへ消えてしまった。

何で『あの騎士』が『蒼夜』だなんて思ったんだろう。あの淋しそうな目を見たからか。だからなのか、あの騎士に対して憎しみの感情は起きなくなっていた。

程なくして軍の支援部隊が広場に着いた。

そこには少女が一人立ち尽くし傍らには胸の部分が破れた服があるだけだった。

side シャルロット out

後の軍の記録によればその町に住んでいた。5万2千人中生きていたのは……ただ一人だったという。

6話 フランス事件〜下〜（後書き）

次回から徐々に進めていきます

アンケートというか募集になるんですが敵キャラの罪名を考えて欲しいと思います。募集するのは“強欲”・“暴蝕”・“傲慢”・“嫉妬”以上の4つです。

例

傲慢 リベリオン
唯我

という感じで感想欄等に送って下さい

ご意見ご感想ご指摘等お待ちしております

7話 正体（前書き）

遅れてすみません

オリストがまだ若干ありますがそれが終わりしだい原作沿いで進めていきます

では本文スタートです

7話 正体

side 一夏

男の話が終わると伏していた。俺達はなんとも言えない気持ちになつていた。シャルルにそんな過去があつた事に俺達は驚愕していた。それと同時に何故彼がそんなに詳細な事を知っているのか不思議に思つた。

side 一夏 out

side シャルロット

話が終わると皆沈黙していた。飾り気無しの実話を体験してもいない男（まだシャルロットしか彼の正体に気付いていない）が語つたのだ。多少不可解な気持ちになるのは仕方ない事だ。

「……………じゃあ、そろそろ帰らせてもらおうかな？」

「ねえ、僕の部屋で少しお話ししない？」

呟く蒼夜の声に反応して、声を掛けると頭を横に振り、去って行った。去り際に小声で

「生きていてくれてありがとう。“シャル”」

“シャル”は蒼夜が僕に付けてくれたあだ名。

やっぱり彼なんだと思い、周囲に気付かれないように、去って行く彼の背中を追い掛けた。

side シャルロット out

side 一夏

あの男が去って数分後血相を変えた千冬姉が食堂に入ってきた。

「織斑、アイツは何処に行った!？」

慌てたように聞いてきた。不信に思いながら答える。

「遅かったか………デユノアはどうした？」

今更の事だがシャルルがいない事に気が付いた。

「織斑先生デユノア君ならあの男の人を追って行きました。」

同じクラスの安藤さんが告げたのを聞くとすぐに千冬姉は食堂を飛び出して行った。

side 一夏 out

side 千冬

あの青年を食堂に送り届けた後、職員室にある自分の席で思考に更

けつていた。あの男がいた地区にあの異形騎士が向かった事は間違えない。

だが騎士の代わりにあの男がいた。あの男にあった時感じた気配。それは気高き騎士の気配だった。

だが現代に、騎士はいる筈もないだがそう感じてしまった。

ふと騎士という単語が引つかかった。

首をひねっていると山田先生が慌てた様子で職員室に入ってきた。

「お、織斑先生！！昼間の男の人ってどこですか！！」

「どうした山田先生！？」

尋常じゃない表情で疾走してきた。

「あのお方の正体が分かりました！！………ときに織斑先生『シルバーナ』という名をご存知ですか？」

「話が跳んだな………確か『奉仕団体シルバーナ』だったか？」

「ええ。………簡単に言えばボランティアグループです。

活動内容は戦時中の地域へ赴き、戦闘で被害に逢った市民を避難誘導やケガ人の治療など数えればきりがないですが、その中でも異端の存在“戦闘処理”………内容は極めて簡単………“報復”です。

正確に言えば仲間が流れ弾や地雷等で死んでしまった場合のみ活動します。ですので普段は別の活動をしています。………そして彼の正体はその『シルバーナ』創設者にして、『戦闘処理』の隊長の様です。」

山田先生が慌てる理由も分かる。私も独自の情報網があるが『シルバーナ』の『戦闘処理』に対しては良い思いは抱いていなかった。何故ならその対象には幼い少年兵も含まれていたからだ。さっきまで感じていた引つ掛かりはどこかへ飛んでいったようだ。どこのだれかわからなかったので一夏とデュノアに監視を頼んでいたが今となつては悪手になったと、考え食堂に急行した。

side out

7話 正体（後書き）

前回の後書きの募集は無期限ですので気が向いたら送って下さい

ご意見ご感想ご指摘等ありましたらどしどし送って下さい

お待ちしております

8話 再敵(前書き)

遅れて申し訳ない

m () m

年末に近付き色々としていて遅れてしまいました

今年もあと5日になりました

あと一・二話更新で今年は終わりになると思います

最後まで突っ走ります!!

では、本文スタートです

8話 再敵

side 蒼夜

食堂を離れ外に向かっていると後ろから呼び止める声が聞こえた。

「……待って!! 待ってよ!! ……蒼夜!!!!!!」

懐かしい声、守ると決めた少女の声、俺に生きる道を教えてくれた人の声……だが振り返って彼女に触れる事はできない。

この数年、俺がしてきたのはこの両手に血を滴らせながらの戦争^{テロ}行為だ。

この身を他人のために捧げるかのごとく戦い続けた。己れの身などにせずに幾千幾万の戦場を駆け抜けた。この身が返り血で真っ赤に染まる事もあった……だが“もう一度でいいからシャル会って、側で守り続けたい”という信念だけは持ち続けた。

「……どこかの誰かと間違えていないかい」

彼女に触れたい感情と血に濡れたこの手では彼女に触れてはいけな
いという理性があった。なので、敢えて突き放すように言い放ち、
立ち去ろうとしたが後ろから腕を掴まれた。

「……放してくれませんか? ……俺は行かなければなら
ないから……ごめんな……」

更に突き放すように言い、腕を掴んでいた手を振り払った。最後の
方について謝罪を述べてしまった。

「やっぱり優しいね、蒼夜。．．．．．これだけは言わせて．．．あの後から今までに何があったかは聞かないし聞こうとも思わない。だけど、私はあなたの隣に立ちたい。．．．あなたがどこに居ようと私は探し出してあなたの側に居ます。．．．．．蒼夜の側に居たい！．．．あなたの側に居ても良いですか？」

シャルが前に回り込み上目使いで聞いてきた。そんな彼女になんと答えようかと思案しているとあの気配がした。シャルの方を向き真剣な目をして

「．．．．．シャル！すぐ、ここから逃げろ！！」

言い放つと同時に目の前に、ニヤニヤした顔で校門の方から男がやって来た。男は俺に向かって高らかに言い放つ。

「お前が『ペインキラー神罰』か？．．．．．まあ、どちらでもいいか党首様からの伝言だ。

．．．．．『貴様のせいで計画に必要な人材は激減の一途を辿ってしまった。故に我らは貴様が大切にしているモノに対して報復を慣行することにした。．．．．．止めるてだてはない。．．．貴様の目の前で大切なモノが消え去るのを見るがいい！！！！』．．．とまあ、こういうことだからそこに居る姉ちゃんをお前の目の前で殺つてやるよ。．．．」

「．．．大罪ケース『色慾ルユスト』．．．罪名コード『凶喜マターホリック』．．．」

厄介だ。ヤツに俺の攻撃は効きにくい。だが、災悪を振り撒くヤツだけは本気で潰さないといけない。

そう思いすぐにシャルを逃がそうとしたが、シャルは俺にしがみつき離れそうになかった。

「・・・シャル・・・俺はお前に謝罪しないとイケない・・・
・・・カティアさんをk「知ってる・・・いや判ったの・・・
・・・多分蒼夜はあの時仕方なく殺したんだよね？・・・あの
時蒼夜の背中には悲しみしかないって気付いたから・・・」
・・・シャル・・・すまない」

心残りを打ち明けるつもりが、シャルは知っていた。知っていて側に居たいと言ってくれた。・・・なら俺は、この目の前にいる災悪を打ち倒そう。

その行為がヤツに殺された（・・・）彼女ら（・・・）に捧げる鎮魂歌になろうともシャルに誓いを立てるために・・・

「 然るべき報いを（アンサラー） 」

叫ぶと同時に首に下げていたチョーカーを弾く。

雷のごとき轟音が響き俺の・・・俺だけの力を身に纏った。

side out 蒼夜

side シャル

蒼夜が首に下げていたチョーカーを弾く、チョーカーが蒼く輝いたと思った時、雷が落ちたような轟音が響き蒼夜は鎧を纏っていた。全身をくまなく覆う蒼銀の装甲。

それは甲殻と言うには金属的で、甲冑と言うには生物的過ぎる。異形と呼ぶには洗練され、騎士と呼ぶには禍々しい。

銀の鬘を海風になびかせ、天を突く三本の雷角を備えた鬼神を象る

フルフェイス
全面兜。四肢を、胴を仰々しくも力強く鎧う紫電帯びる甲殻。肩と肘には爪とも角とも見える大小の尖塔せんとうが伸び、背面に垂れ伸びる七本の尾はそれぞれが鋭利に煌めく蛇腹剣じやばいけんの如く。肩元から垂れた無数の肩巾ひれ。首に巻かれた長大な二重の帯布マフラーは、蒼白の四翼が猛り羽撃く（はばたく）かのように、帯電しながら海風になびく。右の手甲に刻まれているのは、対の曲刃を象った装飾。それがひときわまばゆい電光に煌めいた瞬間、無数の肩巾と垂れた七尾が衣状に連なり、さながら蒼銀の騎士サー・コート外套となつて翻った。

「……フリックス
ナイト・フリックス
……異形騎士……」

呟きが聞こえたのか蒼夜はただ悲しげな目をこちらに向けたが『今はそれ所じゃない』と言いたげに無理矢理、相手の方に向き構えた。蒼夜が相手の方を向いたのでつられて相手を見た。……見てしまつた。

マーダーホリック
凶喜と呼ばれた男は姿がいや形そのものも変わっていた。

そこにはまるでイソシギンチャクの触手のようにうごめく無数の腕は、一本一本が太く逞しい巨人の剛腕。ポコポコと泡立つように肥大する上半身の真ん中で、男の顔は異形に変わる。十メートルを超える巨体となつた体で叫ぶ

「フ、ハハハ……この姿になつたからには簡単には倒されんぞ」

そう言うと剛腕を振り下ろしてきた。『もうダメだ』そんな思いがした。しかし響いたのは雷の轟音と風の鳴る音だった。

気付くと私は騎士に抱かれ（姫様抱っこ）、射程圏外にいた。

「この銃弾で頭が見えたら撃つてくれ。……最後の布石はシャルだけど気負わずに、撃つてくれよ。……」

IS用のスナイパーライフル弾を手にそんなことを言われたのだ
た。

s i d e シ ャ ル o u t

9話 異形騎士と黒き雨との出会い（前書き）

今年最後の更新となります

まだ戦闘シーンになりません

タイトル通り戦闘前に黒兎との出会いになります

では本文スタートです

9話 異形騎士と黒き雨との出会い

side シャル

目の前の光景が信じられなかった。イソシギンチャクのようにうごめく腕は、一本一本が太く逞しい巨人の剛腕。巨体となったその体は十メートル以上。

そんな姿に一瞬で変わった事に私は驚きと戸惑いで一杯になっていた。蒼夜の方を見ると、蒼い雷を纏っていた。

雷が収まるとそこには昼間に現れた『異形騎士』がいた。気付かぬ内に呟く。

「ナイト・フリース
異形騎士」

声が聞こえたのか^{フルフェイス}全面兜の目の部分から悲哀の感情が感じられた。

「フ、ハハハ・・・この姿になったからには簡単には倒されんぞ」

そう言われふとそちらを見ると剛腕を振り下ろそうとしていた。『もうダメだ』そんな思いがした。しかし響いたのは雷の轟音と風の鳴る音だった。

気付くと私は騎士に抱かれ（姫様抱っこ）、射程圏外にいた。

「ヤツの頭が見えたら、この銃弾で撃つてくれ。……………最後への布石はシャルだけど気負わずに、撃つてくれよ。……………」

IS用のスナイパーライフル弾を手にそんなことを言われたのだった。

s i d e シヤル o u t

s i d e ラウラ

保険室で休んでいたが、突然辺りが暗くなった。日が落ちたのかと思ひ窓の外を見るとまだ夕日が見えた。数秒して巨大で異形な生物の影が射したのだと気付いた。

「……………何だあれは!!」

言葉に出来たのはそれだけ。イソシギンチャクのような腕。その腕一つ一つが太く逞しい巨人の剛腕をしていた。その身も巨大で近くにある校舎との対比から十メートル以上はある怪物がいた。混乱しながらも現状を把握しようと思ひ窓辺に近付き観察を始めた。ふと気付くと怪物が私に向けて剛腕を振り下ろそうとしていた。『…………あつ。』気付いた時には既に遅く、剛腕はすぐ目の前に迫っていた。とっさに目を閉じて、来るべき衝撃に身構えた。

…………ブンツ!!…………ザシュツ!!…………ドゴン!!

何かを投げる音が聞こえると同時に何かを切り裂いたような音、地面にめり込む音が聞こえた。

衝撃が来ない事を不思議に思ひ目を開けるとそこには、蒼い一本の大戦斧が怪物の腕を切り裂き地面に突き刺さっていた。

s i d e ラウラ o u t

side 蒼夜

シャルに聖骸の力を混ぜたライフル弾を手渡し相手を睨みつけると怯んだように後退りした。後退した進行方向に銀髪の小柄な少女がいた。気付いた時には腕が振り下ろそうと振り被っていた。一瞬で戦斧を精製し投げつけた。

・・・ブンツ！！・・・ザシュツ！！・・・ドゴン！！

相手の数本の腕を斬り落とし銀髪の小柄な少女の前に突き刺さった大戦斧めがけ駆ける。戦斧に啞然としていた少女は俺に気付き驚愕した表情になった。

「貴様はいつ・・・避けろ！！！！・・・えっ!？」

少女が何か話し掛けられたが、相手が剛腕を振り下ろしてきたのを視界に収めたので注意を呼び掛けたが、驚いた様子で体がすぐに動く体制になっっていなかった。

それを見て、彼女を抱え相手との距離をとった。

「死ねえ！！！」

『マールダーホリック凶喜』は無数にある剛腕を使い殴り掛ってくる。

『小脇に抱えた少女を守りながら戦うのは難しい。・・・なら少女の前に立ち迎撃しながら逃がす事を目指して行動しよう。』と考え少女の前に出た。

side 蒼夜 out

9話 異形騎士と黒き雨との出会い（後書き）

募集は随時求めています

ご意見ご感想ご指摘等ありましたらどしどし送って下さい

来年もよろしく願います

10話 終りの始まり(前書き)

明けましておめでとうございます

m () m

今年もよろしくお願いします

では早速本文スタートです

10話 終りの始まり

side 蒼夜

銀髪の少女を助けるために不意を突き戦斧で大多数あつた触手のような腕の約三割を斬り落とした。だがその事に動揺する事なく、残りの七割の腕で怒涛の巨拳の雨を繰り出してきた。對抗するため雷電を収束させ雷拳で殴り掛かる。だが相手に当たった瞬間拡散してしまう。その事に戸惑っていると剛腕を振り下ろしてきた。急遽、雷化し後方へ逃れた。距離をとり実体化した蒼雷の騎士はため息を荒々しく吐き、どうしたものかと思案した。

「つたく、参るな実際………相性悪すぎたなあ」

呟きながらも後方でライフルを構えたシャルを見つけした。シャルは指示通りに頭を狙い撃つ機会が来るのをジツと待っているようだった。信頼しての行動なので、言い出した俺が音をも上げてもいられない。

「よし!!………ヤルか!!!!!!」

気合いを入れ直し、再び雷化してヤツの近くまで移動し両手を包み込む程に眩く弾けた雷電を、打ち合わせた手の中で収束させ、大戦斧を具現化した。それは先刻造った物とは全く違う物だった。身の丈を超える長柄と上半身よりも広く大振りな片刃の斧頭。三日月を描いた蒼刃に、なお蒼く雷電を纏わせて、俺は振り被りただ振り降ろす。

ただそれだけで、残っていた半数は切り裂かれ振り降ろした衝撃波で凶喜は退く。

追撃のため戦斧を肩に担ぎ、接近して振り降ろす。残る腕も後数本となったので大戦斧を投げ、接近し七尾で残りの腕を突き刺した。投げた戦斧は狙い通り凶喜の顔の周りにあつた分厚い肉を切り裂き異形の顔面が大きく露出した。

「ナイスタイミングアンドナイスショット……シャル」

瞬間額を五発の銃弾が撃ち抜いた。それは五発の弾道を真つ直ぐに重ね連ねた一点射撃ジャックボット。だが俺は驚かない。当てると信頼し狙い撃たせたのだから。

side 蒼夜 out

side ラウラ

私は見つけた。強さの答えを持つ二人に。一人は教官の弟「織斑一夏」。もう一人は「蒼雷の騎士」。彼等には誰にも汚されない誇り……いや、信念があつた。だからあのように強くそして強大な敵に対しても勝利をもぎ取るのだろう。そんな事を考えていると蒼雷の騎士は行方をくらませ、彼の姿・形すら見い出せなかつた。

side ラウラ out

side シャル

敵を倒し一息も着かずに蒼夜はその場から逃げ出そうとしていた。蒼夜を追い掛けて学園の端の海岸にたどり着いた。蒼夜はあの鎧の様なモノを未だに身に付け、僕に背を向けていた。

「……………シャル……………すまなかつた!!!!!!」

彼は振り返る事なく謝罪しだした。

「……………俺がもっと強ければシャルに片棒を担がせる事なく、ヤツを倒せたのに……………俺は……………俺は……………俺は……………自分が憎い……………」

彼の自白は続く。聞く人がどんな顔をしているのか分からず、ただ語る。

「……………なあシャル……………絶対に許せない罪」ってあると思うか？」

話しも佳境に入り、それは唐突に聞かれた。それは彼の中心にある信念のようなもの。だが僕には持てなかったもの。

「……………分からないよ……………けど蒼夜は『絶対に許せない罪』があるって言うんだよね……………だったら僕は有ると信じるよ。」

彼の背負っているものは何なのか未だ分からないが、少しでも肩の荷が降りるよう気遣って行こうと心に決めるのだった。

side シャル out

side 蒼夜

謝罪を述べて続け、話しも佳境に入ったので一つだけ質問した。

「………なあシャル……『絶対に許せない罪』ってあると思うか？」

シャルは『絶対に許せない罪』がどういふことか分かっていないようだったが、俺が信じているなら信じるといふ至極単純なものだった。

微笑を仮面の下で浮かべていると海の彼方から赤黒い鳥が飛んできた。

「………やはり凶喜を倒したか『マイダーホリック神罰』!!」

その鳥はスズメのような体型と返り血を浴びたような体色、そしてクチバシを開閉させながら人語を話す姿は現実離れしていた。

「党首様からの伝言だ!!」マイダーホリック「凶喜を倒した様だがこれで終りではない。………この戦いは開戦の幕開け………終焉の始まりだ!!!!」

言い放たれた言葉は辛辣にこれから起こるであろう事件を指しているようだった。

side 蒼夜 out

10話 終りの始まり（後書き）

もっと面白くしたいのでこーして欲しいやらあーして欲しいなど、ご意見などがありましたらどしどし感想欄に送って下さい。

呼んだ感想でも良いので送って下さい

罪名は随時募集中です

なんか良さそうなモノがあれば教えてください

では次回もお楽しみに

11話 その後（前書き）

遅くなりましたすみません

そういえばいつの間にかPVが5000を越えていました

これもみなさんが読んでくれた結果ですありがとうございます

ところでやっぱり何か特別編を作った方が良いんだろうかと悩んでいます

もしなにかしてほしいイベントがあれば感想欄にどしどし送って下さい

では本文スタートです

11話 その後

side シャル

赤黒い小鳥（？）が話す事の意味がわからなかった。『開戦を告げる戦い』・『終焉の始まりだ』・・・その言葉を聞く限り戦いがまだ終わっていない事が分かった。
その小鳥は踵を返し来た方へ飛んで帰ったように水平線の彼方へ消えて行ってしまった。

side シャル out

side 千冬

私と山田先生で先ほどいた青年を搜索していた。

突然第一級避難警報が鳴り響き、私と山田先生が探していた学生寮から反対の特別室の方で地響きが鳴った。生徒の大半が窓の外を見つめ唖然としていた。ふと目を向けるとそこには十メートル以上の体を持つ怪物がいた。

しばらく見ていると怪物の太い剛腕が三割程斬り落とされた。斬り落とした際蒼い雷が傷口に帯電しているのが見てとれた。

そして思考が停止している間にあの怪物は撃破されていた。

side 千冬 out

side 一夏

シャルルがあの男を追い掛けてしまった後、山田先生が来て大浴場が使える事になった事を聞いた。

シャルルは待つていてもいつ戻って来るか分からないので先に入ることにした。

しばらく湯に身を委ねていると地震の様な揺れが起こった。リラックスしている所にいきなり揺れたので少し動揺してしまう。断続的に揺れが起こりちよつとヤバいなと思いい脱衣場で直ぐ様着替え脱衣場を出た。

地響きは外から聞こえて来るため窓の外を急いで確認した。そこには想像にもしていなかったヤツがいた。

体長十メートル以上でイソギンチャクの様な化け物がいた。驚いている間に化け物の剛腕は全て斬り落とされていた。混乱している頭で目の前で起こっている事を見続けた。

蒼い雷を纏った何か化け物目掛けて何かを振り降ろしていた。

side 一夏 out

side シャルル

あの後、蒼夜は空を見上げ

「・・・近い内にまた会えたらな・・・いや・・・違うな・・・また会おう・・・シャル・・・」

『また会おう』そう言ってくれるだけで僕は嬉しくて、喜びのあまり蒼夜の今現在の連絡先を聞いていた。蒼夜は難しい顔で数秒考え

た後、一枚の紙を僕に渡した。そこにはメールアドレスと携帯電話の番号、現在滞在している場所が記載されていた。

「メールするのも、電話を掛けるのも、別に構わない。・・・だが、決してその場所に遊び感覚で来るなよ・・・最悪死ぬぞ。」

「えっ!?!?・・・それはどういうこと!?!?」

彼が死線を幾度となく越えているのは分かる。だがそんな彼が『死ぬ』という。彼は僕に微笑むと町の方に消えて行った。

嫌な感じがする。もしかして指名手配の殺人犯と暮らしているのではないかと、彼の身近に住んでいる人物を思い浮かべ一喜一憂しながらも心地良い眠りを手に入れるため蒼夜に電話を掛けてみた。

side シャル out

side 蒼夜

シャルと別れ近くの街にある拠点に向かった。俺が設立した『奉仕団体シルバーナ』は紛争多発地域における子ども達に教育や治療の支援を主に行なっている。もちろん国際問題にならないよう正規の手順を踏んで『国際奉仕団体』として設立した。

世間一般の風評は良好であり、下手するとその国の人達から英雄扱ヒーローいされる事もしばしばある。

そんな組織のため各国に行動の起点となる拠点が点在している。拠点には常時数名のスタッフがおり、突発的な自然災害等に対応できるように日々精進している。

．．．．．そして今俺の前にあるボロアパートの一階部分が『シルバーナ本部』になる。

．．．．．敢えて言わせて頂こう．．．．．決して『お金がない』からじゃねえ!!!!!!!!!!!!!!

確かに外形はボロツちいアパートだが、中は無断で改築しているためハイスペックだ。

その性能は某国の最高軍事機密等を守っているスーパーコンピューターをハッキングし、数秒でその機密をコピーし気付かれる事なく通信を切断できる程だ。

「お帰りなさいませ。我が蒼雷の騎士（マイ、マスター）」

アパートのドアを開けると聞き慣れた声が聞こえた。

俺が偶然助けた娘なのだが実家、実父母、実姉妹健在であるのになぜか俺についてきて『我が蒼雷の騎士（マイ、マスター）』等と俺を呼ぶ始末。

まあ俺も『好きに呼べ』なんて言った手前『マスター』ぐらいは許さないとな。

「さて今日はさすがに疲れた。さっさと寝るか」

「マスター。寢床の準備出来ました。」

「何時もありがと。．．．．．フォルカナ」

『フォルカナ』それが彼女の名前．．．．．そして彼女こそ俺がオレで『居られる』いや『繋ぎ止めて』くれている世界だった二

人だけの俺の『守るべき』ものだ。

そう密かに思い、まだギラギラする瞳を閉じた。

s i d e 蒼夜 o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330z/>

IS インフィニットストラトス ~蒼雷の異業騎士と再来の風・黒き雨~

2012年1月14日01時45分発行